

(一) 一端膨大せる細きガラス管に水銀を入れ、空気を除きて密閉したるものを取りて、これを一氣壓に於いて、沸騰せる湯の蒸氣中に入れ、管内の水銀面の昇りたる所を沸騰點といひ、又、細かに砕きたる氷中に入れ、水銀面の降りたる所を氷點と稱す。この二點の位置定まれば、この間を適當に等分し、且、二點の外方にも、同じ様に目盛を及ぼすなり。寒暖計の目盛に種類あり。攝氏寒暖計は氷點を零度、沸騰點を百度とし、この二點間を百等分せるものにして、専ら學術上に用ゐらる。華氏寒暖計は、日常俗間に用ゐるものにして、氷點を三十二度、沸騰點を二百十二度とし、二點間を百八十等分す。

(二) 酸素の性状 酸素は無色無臭の氣體なれども、層厚きときは、青色を呈し、標準狀況に於いて、一立の重量一・四二九五あり。空氣中にて燃焼し難き鐵線も、酸素中にては能く燃焼し、木炭、蠟燭、硫黃、磷の如き空氣中にて、容易に燃焼する物質は、酸素中に於いて、一層盛に燃焼す。

酸素の製法 酸化水銀を分解して酸素を生ずる方法は、稍、多量の酸素を捕集するに適せず。酸素酸カリウムを熱すれば、容易に酸素を發生し、殊に、二酸化マンガンの粉末を混すれば、一層容易にてこれを發生せしむることを得。

(三) 豌豆の花 花冠は、不規則なる形狀をなし、蝶形花冠の名あり。今、これを分離すれば、花冠は五瓣より成り、内、一瓣は大きく、正面に在り、他の四瓣は小さく、横にありて、二對をなす。内部には、十本の雄蕊あり。その中の九本は、相合して一體となり、他の一蕊は、別に分離せり。ゆゑに、これを兩體雄蕊といふ。また、雌蕊は、一本なり。

豌豆の葉 四五枚の小さき葉片より成り、その各片は、葉軸の兩側に對生す。葉軸の先端は、卷鬚となり、他物に巻き着く用をなす。又、葉柄の下部には、二枚の幅廣き葉片あり。相連合して莖を包む。こ

れを托葉といふ。かくの如く、數個の小葉片より成れるが故に、これを總様して複葉といふ。

(四) 昆蟲類とは、蝶、蜂、とんぼ等を總稱にして、空中、地上、水中、地中到處に生活し、その種類約三十萬種に達し、殆ど、全動物界の四分の三を占む。随つて、その習性、體形等も、變化極めて多く、人生に對する關係も、亦頗る大なるものあり。然れども、通有の特質亦少からず。その六足を有することは、最も著しき特徴なるを以て、又、これを六足蟲と稱す。

算術科

- (1) $51 + (1 - \frac{5}{8}) = 136$ 人……志願者の數、 $136 \times \frac{5}{8} = 85$ 人……合格者の數。
- (2) $448 \text{圓} \times \frac{2}{1} \times \frac{250}{350}$ 噸 48圓 (3) $(48.7 \text{圓} + 6.5 \text{圓}) \div (0.115 \text{圓} \times 40)$ 噸 12袋
- (4) $3 \text{町} 18 \text{間} = 198 \text{間} \dots\dots$ 畧、 $198 \text{間} \div 2 = 99 \text{間} \dots\dots$ 横、 $193 \times 99 = 19602$ 歩、 $19602 \div 30 = 653$ 畝と12歩、即ち 6町5段3畝12歩

第七十四回

國語科

- (一) 不完全 破裂 評判 防禦 驅除
- (二) 忠告 實意を以て、人の過などを告げ、いましむること。幕府 將軍の居所。武家の政府。熔岩 噴火山の火口より流れ出でたる岩石。生蕃 王化し服せざる野蠻人。

裝飾品 いざりつけのしなもの

三 丁度、その時分に、入日が、あかくと、海の水に映りて、そのいろいろの美しいことは、何とも、いひ方のない程、立派である。

四 郊外散歩誘引の文。

拜啓。唐突の義ながら、只今、田中、山本、遠藤の三氏、拙宅に來り會し、試験のために、一同疲勞したる身體を、郊外の清潔なる空氣に曝らし、健康の恢復を圖らんと、相談に一決致し候につきては、御賛成に御座候はゞ、即刻御出馬下され度、費否いづれもと、至急御回答相煩はし度、待ち奉り候。敬具。

算術科

(1) $\frac{2}{7} \times \frac{1}{5} \times \frac{2}{3} \times \frac{1}{3} + \frac{1}{5} = \frac{2}{7} \times \frac{11}{5} \times \frac{5}{3} + \frac{9}{5} = \frac{2}{7} \times \frac{11}{5} \times \frac{5}{3} \times \frac{5}{9} = \frac{110}{189}$ …… 答

(2) $42 \text{ 錢} \times \left\{ 1 - \left(\frac{1}{8} + \frac{6}{11} \right) \right\}$ 答 18 錢 7 厘 5 毛

(3) $(25 \times 30 + 30 \times 25 + 26 \times 15) : 25 \times 30 = 765 : x$
 $: 30 \times 25 = x : x^2$
 $: 36 \times 15 = x : x^2$
 答 { 甲 231 圓 25 錢
 乙 231 圓 25 錢
 丙 202 圓 50 錢

第七十五回

國語科

一 みやこは便利である。電信や、電話や、郵便などの、おくりとゞけが、まことにはやいから、また、きをする程の間に、数十里の外と、互に、音信を通ずることが出来る。汽車があり、人力車があり、電車があつて、人や物をはこんだり、あちらこちらと、行きかふことの便利が、備はつてゐないことはない。

二 規則 きぎて、また、 應用 あてまて、つてひこな 研究 けんきゅう、よくきはむ 訪問 ほうもん、人の内へおこ 委任 にん、ゆだねまか

三 入學試験の合格を父兄に報ず。
第六十三回國語科(五)を見よ。

算術科

(1) $\frac{32}{7} = 3.1428, \quad 3.1428 - 3.1416 = 0.0012, \quad 1 - 0.0012 = 0.9988$

(2) 12 町 20 間 = 740 間 = 4440 尺, 6 間 4 尺 = 40 尺, 故に、4440 尺 + 40 尺 = 4480 尺 …… 答

(3) 15 圓 $\times (1 + 0.2) = 18$ 圓 …… 賣上高, 18 圓 $\div 0.5$ 圓 = 36 …… 賣割きたる買數, 故に、融解したる氷の買數は、60 貫 - 36 貫 = 24 貫

(4) $(20 + 10) \div \left\{ 1 - \frac{1}{5} + \frac{2}{3} \right\}$ 答 225 人

(5) $10 \times \frac{6}{2} \times \frac{5}{3}$ 答 50 反

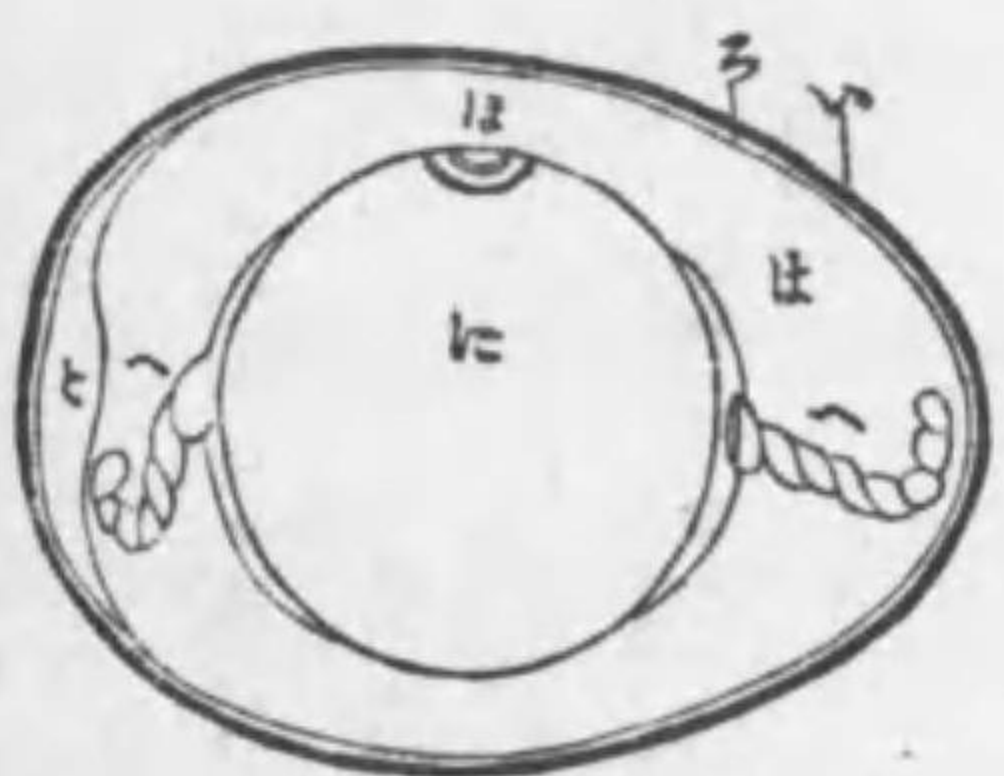
第七十六回

國語科

- (一) **イ 需要と供給** その用おけてもとむることさ、他より需めらるる、その用に供ふることさ 「水の需用多くして供給不足」など。 **象の皮膚は灰白色なり** 象さいふ動物のはだへの色は灰さいつた白色である。
 - (二) **い 穀物と魚類とを交換す。** **ハ 巨額の貯蓄** ちよくくはたへるな金額のたかく澤山の貯金。
 - (三) **文會に友を招く。** **ろ 修繕。** **は 増築。**
- 略文御免下さるべく候。然者、明日は。午後六時より二三の吟友弊堂に會し、席上推戴を聞はし候約有之候間、幸に、御閑暇に候はゞ、御光來下され度、奉待候。勿々。

理科

- (一) ゑんどうの花の構造。
第七十三回理科の(三)を見よ。
 - (二) 鶏の卵の構造は下圖の如し。
- | | | | | | | |
|---|---|---|---|----|---|---|
| い | 卵 | 殻 | ろ | 卵 | 殻 | 膜 |
| は | 卵 | 白 | に | 卵 | 黄 | |
| は | 胚 | 盤 | へ | 蛋白 | 紐 | |
| と | 氣 | 室 | | | | |



- (三) **らつこ** は游泳極めて巧にして、常に海流の衝激する場所に住む。
あはび は近海の潮流佳良なる所に住む。 **はまぐり** は東海及び内海に多く産す。
いら は亞細亞洲の特産にして、常に、穴中に棲む。
- (四) 光が空氣より水或はガラス等に入る場合には、屈折角は入射角より小なり。即ち、光線は法線に近よりに屈折す。逆に、光が水或はガラス等より空氣中に出づる場合には、光線は法線に遠ざかりて屈折す。茶碗の底に銅貨を置き、水を注げば、浮き上りて見ゆるは、これがためなり。

算術科

- (1) $17\frac{5}{9} - 8\frac{5}{24} + \frac{2}{3} = 9 + \frac{5}{9} - \frac{5}{24} + \frac{2}{3} = \frac{648}{72} + \frac{40}{72} - \frac{15}{72} + \frac{48}{72} = \frac{721}{72}$
- (2) $\frac{721}{72} \times \frac{8}{45} \times \frac{2}{1} = \frac{1442}{405} = 3\frac{227}{405}$ …… 噸
- (3) $(4 \times 10 - 28) \div (4 - 2) = 6$ …… 鶏の頭数、 $10 - 6 = 4$ …… 雉の頭数。
- (3) $18\text{町}45\text{間}4\text{尺} \times 2 \times (7 - 1) \times 4$ …… 噸 25里32間

第七十七回

國語科

- (一) **イ 收穫** **ロ 鳥嶼** **ハ 排斥** **ニ 地殼** **ホ 錐形**

- (二) **イ** 測量 （數學により、物の高さ、深さ、長さなどを測ること） **ロ** 勤儉 （仕事につとめ、けんやうすること） **ハ** 勝地 （乳敷のよきところ）
- ニ** 警戒 （注意して戒備すること） **ホ** 委任 （まかせゆたぬること）
- (三) **イ** 機械 **ロ** 袴 **ハ** 障子 **ニ** 鐵瓶
- ホ** 明石の城も、人麿の社も、木の間に見ゆるなり。

算術科

- (1) 運算を略す 略 25
- (2) $(10\text{袋} \times 15656 - 17690\text{袋}) + (10\text{袋} - 5\text{袋}) = 3794 \dots$ 小児の人数、 $15656 - 3794 = 11862 \dots$ 大人の人数。
- (3) $\frac{12}{60 \times 36} \text{ 時} = \frac{1}{180} \text{ 時}$ (4) $225 + (1 - \frac{5}{8}) \text{ 時} = 600 \text{ 人}$ (5) $(510 - 450) + 450 \text{ 時} = 2 \text{ 割}$

第七十八回

國語科

(一) 我が大日本帝國の憲法には、その第一章に、おもに、天皇陛下の御大權のことを定め、その第二章には、われわれ臣民の權利 （身に備へし、勢力、事に當り、その勢力によりて、事を處置するを得るもの） 義務 （身のつとめ、身に附する道理、權利の對語） のことを定め、その第三章には、帝國議會のくみたと、その權限 （權力の實際） とが定めてある。

- (二) 今朝から、雑兵 （古のいやし） どもを、この槍にて、つきくづしましたゆゑ、槍がたいそうよこれてゐます。槍を洗ひ清めてから、あなたのお相手になりませう。
- (三) 還俗 （僧をやめて、俗にいへること） 涉獵 （あさること） 素焼 （陶器の一度やきたるばかりにて、うすい） 楨杆 （てい） 淘汰 （たうた）
- 多くの物を、ある目的を以て、えりわくること。 信教 （しんけう） 宗教を信ずること。 装置 （ちゆうち） 端緒 （たんじゆ） 禁治産 （きんちさん） 財産權を行使する能力を禁ずること。 （民法上のこと、二種あり、直系親 （ちよくいしん） 祖先より、嫡子相續して、正しくつながらり居る親族。即ち自己又は配偶者の出でたる者及び、自己又は配偶者の出でたるものには、直系親なり。例へば、自己又は配偶者の祖父母、父母及び子孫の如し。傍系親に對する語。）
- (四) **イ** 裁判所の事務を管理する。 **ロ** 重荷を運ぶ。
- ハ** 怠惰を羞ぢて規律を守る。 **ニ** 巡查の靴の音が聞えた。
- ホ** 西洋料理の御馳走が出た。
- (五) 春風に尾をひろげたる孔雀かな。
春風が、そよ／＼と吹いて、うららかな春の日に、孔雀が彩紋ある大きな尾をひろげてゐるさまは、美麗で、ゆつたりとして、何ともいはれぬ風情である。これは、正岡子規のよんだ句。

歴史科

(一) 大化時代に於ける班田收授法 孝徳天皇のとき、制定せる法。人民に、土地の私有を禁じ、財産を等分するなり。即ち六年毎に戸籍を檢し、人民一般に、口分田を給ふ。男には、一人毎に二反（今の二反四畝）、女には、その三分の二を給ふ。これ班田なり。この田より毎年、稻百束（今の二石二升九合）を獲、

その中より四束四把(今の八升九合)を官に納む。その人死すれば、田を官に還附せり。これ收授なり。
 租庸調 糶稻毎年百束のうちより、四束四把を官に納む。これを田租といふ。地につきて徴するものなり。また、正丁一人毎に、絹、絶、綿、布などの類を調といふ。戸につきて徴するものなり。この外にまた、菜類、魚類等を買するを調の副物といふ。次丁は、二人、中男は四人にて、正丁一人の貢額に同じとす。また、正丁一人に、毎年十日づゝ夫役を課す。これを歳役といふ。もし、自ら、身役につかざれば布二丈六尺、もしくは、郷産のものを代納せしむ。これを庸といふ。身に就き徴するなり。次丁二人にて正丁一人に同じとす。但し、京畿は庸を免せらるゝなり。

(二) 鎌倉時代に於ける守護地頭 守護とは、一國ともいふべき廣き版圖内に、警察、徴兵の權を行ふ官吏なり。この時、國司はありしかど、莊園私領増加して、天下に半し、國司の權は、他家の莊園私領に及ばざりしにより、武士にて國司に補せられたるものゝ外は、權力振はず。大抵は、京都に止りて、代官を下りせしめたりし故、地方の統御緩み、盜賊、謀叛人横行したりき。故に、頼朝、奏請して、國司のほかに別に守護職を置き部下の將士を以て、これに補せしめしなり。地頭は、守護の下に居て、古の郡領に代り諸家の莊園に對して、收稅權を行ふ官吏なり。即ち、私の莊園とても、自ら支配することを許さざりしなり。

(三) 秀吉は、夙に、明を討たんとする志あり。さきに、九州を征せしとき、宗義智をして、朝鮮王李昭に諭し、我が軍を先導せしめんとせしに、李昭明を恐れて、これに應せざりき。天下一統の業既に成るに及び秀吉兵氣の、猶、盛なるを見、外征の意、いよいよ切なり。乃ち蘭白を養子秀次に譲り、自ら太閤と稱し陣營を肥前の名古屋にたて、遂に朝鮮を征伐するに至りしなり。

(四) 臣下の數代その主家に仕へたるもの、これを譜代といふ。家康が三河以來の家臣を譜代大名として待遇せるに起る。外様は、關ヶ原役後、新に徳川氏に屬せし大名をいふ。九州の島津、鍋島、黒田、細川、中國の毛利、福島、池田、四國の山内、蜂須賀、奥羽の伊達、上杉、佐竹、北陸の前田これなり。外様は、大抵、大藩にして、向背の程も計り難ければ、その所領も、譜代を間に排置して、萬一に備へたり。

(五) 平田篤胤 羽後國秋田の藩士。有名なる國學者。二十才の頃、俄に志を立て、獨力艱難すること四年、寛政十三年、備中松山侯の臣平田篤胤の養嗣となり、本居宣長の著書を見て、古學に志し、神道の主旨を唱道す。著書の數、擧げて數ふべからず。天保十四年九月秋田に歸り、病んで歿す。年六十八。

地理科

(一) 日本群島の近海には、黒潮(日本海流)親潮の二あり。黒潮は暖流にして群島に近く、太平洋上を南西より北東に流れ、その一支對馬海流は、日本海に入り北東に流る。共に、我が國の雨雪量に影響する事頗る大なり。親潮は寒流にして、北日本の東側を南に下り、附近の氣温をして、著しく低からしむ。寒暖兩種の海流接觸する邊の海面には、往々海霧起りて航海の困難を感せしむることあり。

(二) 本邦輸出及び輸入品の主なるもの。
第七十二回地理歴史科
 の(二)を見よ。

(三) 滋賀縣(縣廳所在地大津市)、京都府(府廳所在地京都市)、大阪府(同大阪市)、兵庫縣(縣廳所在地神戸市)、奈良縣(同奈良市)、和歌山縣(同和歌山市)。

(四) 上海 清國にあり。シカゴ 北米合衆國イノイズ州にあり。マルセイユ 佛國の地中海沿岸にあり。メルボルン オーストラリアにあり。

理科

- (一) 油菜の花は、各花梗ありて、莖の上部に生じ、下方のものより、順次上方に向ひて開く。今、一の花を取りて、檢すれば、外部には、四枚の萼片あり。花冠は黄色の四瓣より成り、二枚づゝ相對して、十字狀を成す。故に、これを十字花冠と云ひ、又、瓣の相互に離れたるにより、離瓣花冠の名あり。
- (二) 哺乳動物とは、動物中最も高等なるものにして、吾人が獸類と名づくるところのものは、凡てこれに屬す。人類も、亦、哺乳類に屬すべきものにして、即ち、孰れも皮膚に毛を有し、肺を以て呼吸し、温血なり。而して、その子を胎生し、乳汁を以て、これを哺育す。
- (三) 呼吸により炭酸瓦斯を生ずるや、否やを驗せんと欲せば、清潔なる石灰水中に細管を以て、空氣を吹き入るゝときは、忽にして、白濁を生ず。これ吾人の肺より呼出する氣中に炭酸瓦斯を含めるが故に、石灰と化合して炭酸石灰を生ずるによるなり。
- (四) 寒暖計はおよそ物は熱に遇ふときは、その容積を膨脹し、寒冷に遇ふときは、その容積を收縮すとの理を應用して作りたるものなり。華氏攝氏の度盛の異點は、第七十三回理科の(一)に就きて見よ。

算術科

- (1) $\frac{15}{4} \times 144 \div 5$ 答 108個
- (2) $\sqrt{7.25 \times 3.81} = 27.84$, $27.84 + 0.32 = 87 \dots$ 答 $\square \frac{8}{9} \times \frac{3}{4} = \frac{2}{3}$, $\frac{8}{6} + \frac{2}{3} = \frac{8}{6} \dots$ 答

- (3) $85 \div (1 - \frac{3}{8})$ 答 136張
- (4) $(15 \times 20) \div 2 = 150$ 坪.....三角形の總坪數、 $326 \text{圓} + 150 = 2.24 \text{圓} \dots$ 一坪の地價。

白雪の富士の高嶺は
高くとも登らば登る
道はありなむ
(蘆花)

中學 實業學校
高等女學校

入學試驗豫備書 をばり

神奈川縣立農學校解答

明治四十三年十一月五日印刷
明治四十三年十一月十日發行

著者 普通學講習會

發行者 田中 太右衛門
大阪市南區安堂寺橋通四丁目二百四十二番屋敷

發行者 大塚 宇三郎
大阪市南區安堂寺橋通四丁目二百三十四番屋敷

印刷者 山田 元吉
大阪市南區安堂寺橋通二丁目二十六番屋敷



賣捌所

⊕ 中 宋 榮 堂
〔電話南千六百七拾四番〕

大阪市南區心齋橋通安堂寺町南へ入

終

